

1 題材名 いのちを見つめる ―ドキドキを感じよう―

2 題材について

今年度、5年生の保健学習「けがの防止」の単元で心肺蘇生法の講習後に、問いを立て、対話を行った（50～51頁参照）。対話を重ねていく中で、そもそも、なぜ胸骨圧迫を行うのか？という話題になったとき、心臓が止まったら胸骨圧迫をすればよいことは理解しているものの、止まってしまった心臓の代わりに自分の手がポンプになって押すのだということに初めて気づいた子どもがいた。この子どもの発言や子どもたちが心肺蘇生法の講習後に書いた振り返りのノートの記述から、知識や技術を中心に習得することで終わる心肺蘇生教育では、何となく自分でも助けられるという自己有能感が高まるだけにとどまり、いのちを救おうという実感を持たせることは難しいのではないかということを感じた。また、学校における心肺蘇生法の学習は、一定の学年を対象に単発で行う場合が多いが、小学校低学年から発達に応じた指導を段階的に、かつ定期的に反復して学ぶことが必要であるといわれている。そこで、4年生の本学習では、心肺蘇生の知識や技術だけではなく、科学的な根拠を理解することによって、実感を伴った学びになるようにしたいと考えた。

心臓は生命を維持するうえで欠かせない血液循環の要であるが、この休むことなく働き続けている心臓について、子どもたちが普段意識することはあまりない。自分のからだの状態を知ることで心臓に関心を持ち、その働きを学ぶことによって、心臓が動いていることが、まさに生きていることであることに気づき、生きることやいのちについて考えてほしい。そして、ほとんどのけがや病気は医療機関以外の場所で発生し、その場に居合わせた人（以下、バイスタンダーという）の多くは一般の市民である。バイスタンダーは正しい心肺蘇生法や応急手当を身につけ、速やかに救護の手をさしのべることが大切である。この学習を通して、小学生でもバイスタンダーの役割があり、自分にもできることがあることに気づかせ、なぜ、人のいのちを助けることが大切なのかを問い続けようとする子どもを育てたい。

3 学習指導計画（2時間目／全3時間）

- 第1次 人がたおれていたらどうする？ ―きょうこつあっぱくとAEDについて学ぼう― …1時間
- 第2次 ドキドキを感じよう ―心ぞうのはたらきについて学ぼう― …本時1／1時間
- 第3次 プッシュ大作戦 ―きょうこつあっぱくをマスターしよう― …1時間

4 本時の学習について

(1) 本時のねらい

- ・心臓は休むことなく全身に血液を送り続ける働きをしていることがわかる。
- ・心臓の働きを体感し、胸骨圧迫は心臓の代わりに血液を送る手段であることを知る。

(2) 予想される本時の展開

主な学習活動と子どもの姿	留意点
1 前時を振り返る	<ul style="list-style-type: none"> <li>・簡易型心肺蘇生訓練キットを使用して胸骨圧迫を行う</li> <li>・心拍数が変化した場面を思い出してみる</li> <li>・模型を用いて、心臓が全身に血液を送り届けることを説明する</li> <li>・テンポや深さ、圧迫解除ができていないかは問わない</li> <li>・何人かに発表させて全体で共有する</li> </ul>
2 心臓がドキドキした経験を振り返る	
3 心臓の働きを知る	
4 学んだことを振り返り、胸骨圧迫を行う	
5 活動を通して分かったこと、感じたことを振り返り、次時の学習の方針を考える	

□授業後の話し合いで話題にしたいこと

- ・心臓の働きを学ぶ意義と子どもたちの学びの姿から見えたこと
- ・小学校6年間を通した心肺蘇生教育について

【参考文献】

日本臨床救急医学会 学校へのBLS教育導入検討委員会 「心肺蘇生の指導方法、指導内容に関するコンセンサス2015」